「雇用」問題のパラダイム転換に向けて

２０１２．９．３　吉村金一郎

１．　はじめに

　・　「雇用問題」は、現在、日本にとどまらず世界各国で共通の大問題である。

* 「福祉国家」：　「完全雇用」の達成は譲ることのできない国民的合意。

　－　適切な有効需要喚起策により達成可能との前提：

失業の存在　➪　公共事業による景気刺激策　➪　経済成長　➪　失業の解消

* 世界各国で巨額の財政支出をともなう失業対策が実施されているが、解決の兆しは見えない。
* 「完全雇用」はあり得ない時代に突入したとの認識のもとに「雇用問題のパラダイム転換」を行い

　　問題に取り組むことが求められているのではないか？

２．　「雇用」について

　・　　＜　求人　＞　　　　　　　　　　　　　　　　＜　求職　＞

　　　仕事の提供　　　　（　仕事の分配　）　　労働力の提供

　　給与・賃金の支払い（　貨幣の分配　）　収入➪　必要な財・サービスの入手（財・サービスの分配）

* 「雇用」は普通は有償雇用労働のみを意味する。
* マズローの欲求が段階説：　人間の基本的欲求を低次から述べると

第一段階：　生理的欲求 （ Ｐｈｙｓｉｏｌｏｇｉｃａｌ　needs ）

第二段階：　安全の欲求 （ Safety needs ）

第三段階：　所属と愛の欲求 ( Social needs / Love and belonging )

第四段階：　承認（　尊重　）の欲求 ( Esteem )

第五段階：　自己実現の欲求 ( Self-actualization )

個人の立場から見ると、仕事＝働くことは、欲求五段階の全てとかかわりがある。

* イリイチのシャドーワーク論

主婦の家事労働等の無償労働

―　ＮＰＯなどでのボランティア活動

―　社会的企業　　　　　　　　　　　　　　　　　第三部門（　市場部門・公共部門以外　）での仕事

* 用語：　「働くこと＝仕事」を用い、狭義の「雇用」にとどまらないで考える。
* 「働くこと＝仕事」の種類

　－　ハンナ・アレント：　労働(labor)、仕事(work)、活動(action)

－　広井良典：　生存のための労働、賃労働としての労働（貨幣獲得）、自己実現のための労働

　　－　ロバート・ライシュ：　ルーティン・プロダクション（生産）、インパーソン（対人）、シンボリック・

アナリスト（シンボル分析）

３．「雇用」に何が起きているのか？

　・　現在までに起きてきたこと

　　－　ジェレミー・リフキン：アメリカでは１８５０年には労働人口の六割が農業にたずさわっていた。だ　　　　　　　　が今日農業に直接従事している人間の割合は２．７％を切ってしまった。第二次大戦以降、農業を捨てたアメリカ人は１５００万人を超えている。

　　　　　　第三次産業革命は、いまだその初期段階にあるとはいえ、農業、製造業、サービス部門の数千万人の労働者を職場から放逐してきた。新たなテクノロジーがハイテク化の流れに沿った世界経済システムの改革に道を開き、それに伴って商品生産やサービスの提供に必要な世界の労働力の削減をもたらしたのである。しかも、昨今のリエンジニアリングやオートメーション化の波はまだ、将来にわたる生産性の飛躍的増大に向けた技術革新のほんのとば口にすぎない。

　　－　ゲッツ・Ｗ・ヴェルナー：　生産性発展は需要発展をとっくに追い越しているのです。市場は飽和状態にあり、この過剰な財を生産するために、私たちはますます少ない人手しか必要としない。

私たちの経済の生産性は絶えず上昇する一方なのでその結果農業であれ工業であれ、主に手仕事によって国民経済の成果に貢献してきた人間がますます失業に追い込まれるという事態が生じている。

根本的に見て、失業はじつは巨大な成功の証しなのです。人間は多くの労働から解放されますから、私たちは新たな課題を探すことができる。

　―　広井良典：　「生産性が上がりすぎた社会」：　市場経済の領域における「生産（ないし供給）過剰」が生じるという、現在の先進諸国あるいはポスト産業化社会をおおっている基本的な構造であり、その具体的な結果の一つは、これらの国々における慢性的な高失業率である。別の言い方をすれば、日本を含む先進諸国においては、雇用に関する”椅子取りゲーム“とも呼ぶべき状況が生じている。

　　　　　　興味深いことに、ローマ・クラブは「雇用のジレンマと労働の未来」(１９９７年)と題する報告書のなかで、“楽園のパラドックス”という議論を行っている。

　　　　　　それによれば、技術革新とその帰結としての大幅な労働生産性の向上により、われわれは以前のように汗水たらして働かなくてもよくなり、”楽園“の状態に少しずつ近ずきつつある。ところが困ったことに、「すべてのものを働かずに手に入れられる」楽園においては、成果のための給与が誰にも支払われないということになり、結果として、そうした楽園は、社会的な地獄状態―　現金収入ゼロ、１００％の慢性的失業率　－　になってしまう。

　　　　　　これは、一見納得しがたい議論のようにも映るが、考えてみれば当然のものであり、つまり、「生産性が高度に上がった社会においては、少人数の労働で多くの生産が上げられることになるので、「その結果、自ずと多数の人が失業することになる」ということだ。まさに「パラドックス」であり、しかし紛れもなく現在の先進国で起こっている事態である。

　　　　　　同時にこのことは、（「少人数の労働で多くの生産が上げられる」という場合のその少数の者に仕事と富が集中することになるわけだから、）仕事を持つ者―持たない者、あるいは富を持つ者―持たない者との間で二極化が生じることを意味し、それが「過剰」の問題であるとともに「分配」をめぐる問題であることを提起する。

* 働くこと＝仕事の未来：　「ポスト・ヒューマン誕生」レイ・カーツワイル、ＮＨＫブックス

２１世紀には、技術革新が急加速し、生産性はそれにともない飛躍的に向上する。

　　　－　収穫加速の法則：　人間進化の生物的な革新に続いてテクノロジーの革新が起こるが、進化の速度は本質的に加速していく。

　　　－　特異点：　テクノロジーが急速に変化し、それにより甚大な影響がもたらされ、人間の生活が後戻りできないほどに変容してしまうような、来るべき未来のことだ。

　　　　　　この概念の根本には、人間が生み出したテクノロジーの変化の速度は加速していて、その威力は、指数関数的な速度で拡大しているという考え方がある。指数関数的な成長は、最初は目に見えないほどなのに、そのうち予期しなかったほど激しく、爆発的に成長する。

　　　－　「曲線の折れ曲がり地点」：　特異点に到達すれば、われわれの生物的な身体と脳が抱える限界を超えることが可能となり運命を超えた力を手にすることになる。

　　　　　　われわれは今、こうした移行期の初期の段階にある。パラダイムシフト率（根本的な技術的アプローチが新しいものに置き換わる率）と、情報テクノロジーの性能の指数関数的な成長はいずれも、「曲線の折れ曲がり地点」に達しようとしている。この地点に来ると、指数関数的な動きが目立つようになり、この段階を過ぎるとすぐに、指数関数的な傾向は一気に爆発する。今世紀の半ばまでには、テクノロジーの成長率は急速に上昇し、ほとんど垂直の線に達するまでになるだろう。

　　　－　２１世紀を牽引する中核技術：　１）コンピューター：　ムーアの法則＝１８か月ごとに能力倍増、２）Ｄ：　遺伝子工学。３）Ｎ：　ナノテクノロジー、４）Ｒ：　ロボット工学

４．　働くこと＝仕事のパラダイム

* 現状の何が問題か？

－　生産性の向上により、生産物＞需要だが、失業すると必要な財・サービスが手に入らない。

　　（　分配構造に問題あり。　）

　　　　　失業する者たちが失う最大のものは、”社会から追い出されること“。失業者は公共の福祉に貢献する機会を奪われることにより、苦境に立たされる。

―　これは、現行のパラダイムが、

1. 「働かざる者、食うべからず」
2. 「ひとは自分自身のために働き、それによって得られる貨幣収入で生活する」

　　　―　時代背景：　このパラダイムは産業革命期に確立された。すなわち、生産性が低く社会全体に充分な財・サービスがいきわたるだけの供給が行えなかった。また、労働市場が成立し、労働力の対価として貨幣が支払われるようになった。

　　　－　その他の問題：　１）働く場での、個人の欲求（マズローの五段階欲求）の充足、２）　第三部門での働きに対する貢献評価と処遇（主婦の無償の家事労働、ＮＰＯなどでのボランティア活動、社会的企業での仕事など）

５．　問題解決

　対策１：現状の延長線上での対策：　「大失業時代（the End of Work）」ジェレミー・リフキン、

ＴＢＳブリタニカ

* 労働時間短縮：　高生産性達成部門の生産性向上に見合った、労働時間の短縮を実施。

－　生産性向上による失業拡大の防止。

―　余暇拡大による個人生活の改善、ボランティア活動などの社会貢献拡大

* ボランティア活動への＜影の賃金＞支給：　ボランティア活動時間に応じて個々人の所得税を控

除する。

* 地域サービス活動に対する＜社会的賃金＞の支給：　半恒久的失業状態に置かれながらも、職業訓練を受けて、第三部門内の仕事に就こうとする意欲のある人々に対して、各種の福祉手当に代わる＜社会的賃金＞を支払う。

　□対策１に対する見解：　「労働時間の大幅短縮」は実現しにくい。理由：１）サービス分野の大半の仕事（介護・看護・保育・教育・文化など）は生産性の向上が難しい、２）生産性向上の著しい分野ではグローバルな競争があり、各国での社会制度的側面の強い労働時間の短縮には手が付けにくい。生産性向上分の還元は価格引き下げに向かっている。

　対策２：　パラダイム転換：　「ベーシック・インカム」ゲッツ・Ｗ・ヴェルナー、現代書館

* 「働くことと収入を切り離す」：　「市民全員に無条件にベーシック・インカムを支給する」

－　「哲学」：　「わたしたちには、これだけの人間がいて、これだけの財がある。そしてわたしたちにはこれだけの財があるのだから、これだけの貨幣を印刷することができて、人々に分配することができる」

* ベーシック・インカムの定義：　１）その人が進んで働く気がなくても、２）その人が裕福であるか貧しいかにかかわりなく、３）その人が誰と住んでいようとも、）その人がその国のどこに住んでいようとも、社会の完全な成員すべてに対して政府から支払われる所得である」（Van Parijs）
* 「無条件のベーシック・インカムは何をもたらすか？」：

　　　第一に、賃金と給与はその一部がベーシック・インカムによって置き換えられるので、（労働によって得られる）実質的な手取り額は下がる。しかし、下がった賃金と給与は（ベーシック・インカムによって）補填されるから、各個人の購買力は維持される。

第二に、国家は市民に対する社会給付及びその他の支払いを廃止することができる（年金、失業手当、生活保護、児童手当など）。

第三に、第二にかかわる行政経費を削減できる。

* 労働の二つの領域：　第一は、自然基盤と物質に関係する労働。過去の数千年間、わたしたち人間は常に物質的な欠乏を経験してきた。過剰という言葉を用いるようになったのは数十年来のことに過ぎない。これは、自然科学にもとづく技術的進歩とそこから成立した産業革命のおかげ。

第二は、人間に関与する領域で、引き続き膨大な量の労働が必要とされる。わたしはこれを「文化的労働」という包括的概念で捉えている。たとえば、教育や教養、老人介護や青少年育成などの社会的仕事。将来の老齢人口の増加を考えると、その需要はものすごく増大する。この分野は、技術的な生産性が問題になるのではなく、人間同胞としての配慮が必要だから、単純には合理化できない。これが将来の労働分野になる。

* 労働の未来：　ベーシック・インカムが導入されれば、市民は生活の糧を得るために、本来の自分の能力や技能にまったくふさわしくない仕事を果たさねばならない職場探しから解放され、各人が持っている個人的な潜在能力を発揮しうる職場を探すことができる。その結果、一般に意義があると考えられる職場のニーズがますます高まるであろう。なぜなら、そのような職場は、第一に、求職者自身の意図にかなっているからであり、第二に、職場に求められる一般的道徳的な諸要求に対応しているからである。そうなれば、副次的コストがなくなって純粋に労働コストだけになるから、現在コスト面で経営が困難になっているサービス分野　―　老人介護や老人看護、教養文化面での仕事　－　に膨大な仕事の可能性が生まれる。
* 参加・承認・信頼：　ラディカルな決定を可能にする扉を開くのは、ベーシック・インカムだけである。そしてこの自由には責任がともなう。

　　　　　無条件のベーシック・インカムには、決定的な前提条件がある。すなわち、私たちは市民全員　が共通の福利を追求する点で結ばれていることを信頼しなければならない。わたしたちは、個人が各自の貢献をする準備ができていることを信頼しなければならない。これは、すでに今日わたしたちの秩序の基盤になっているものであるがゆえに、ベーシック・インカムはわたしたちが現にすでに持っているものの当然の発展的帰結であり、同時に未来への一歩、もう一つの自由への一歩なのである。

* ベーシック・インカムの財源：

　　－　ヴェルナーは、段階的に消費税を引き上げる一方、所得税を引き下げ、最終的には、消費税に財源を一本化することを提案している。

　　　　これは、価値の創造に対して課税すべきではなく、財・サービス（資源）の消費に対して課税すべきとの考え方に基づく。

　　－　財源については、いろいろな考え方があり、所得税の累進性強化、ストック課税（相続税、不動産関連など)強化などの提案もあるが、今回は詳細には触れない。

* その他の論点：

　－　最も基本的なものは、なんらかの形で働く（社会貢献を行う）義務の有無をめぐる見解をめぐるものがある。

　－　その他では、支給額をめぐるもの、支給水準をいくらにするのか、またその額は全員一律にするのか、老人・こどもは支給額を減らすのかなどがある。

　－　今回、ベーシック・インカムを取り上げた主旨は「働くことと貨幣の分配を切り離す」というパラダイム転換を図ることにあるので、上記のようなベーシック・インカムの詳細の制度設計には立ち入らないことにする。

* 参考文献
* 「ベーシック・インカム」立岩真也、青土社、２００７年
* 「グローバル定常型社会」広井良典、岩波、２００９年
* 「「分かち合い」の経済学」神野直彦、岩波新書、２０１０年
* 「ＴＨＥ　ＷＯＲＫ　ＯＦ　ＮＡＴＩＯＮＳ」ロバート・Ｂ・ライシュ、ダイヤモンド、１９９１年